

目次

二音節を単位の基本とする韻律について……………	柳田 征司……………	一
「善悪」の副詞用法の発生……………	玉村 禎郎……………	七
——近代語への歩み——		
接続助詞的用法としての「定(チャウ)」と「条(デウ)」……………	坂詰 力治……………	三
施陀羅が子日蓮の言語生活寸描……………	杉本つとむ……………	五
抄物における反実仮想表現……………	山田 潔……………	七
ハビアン『平家物語』と間(あい)の語り		
〈「と申す」「と聞こえた」の文体を再検討する〉……………	小林 千草……………	九
『雑兵物語』東京国立博物館蔵写本の本文と系統……………	浅川 哲也……………	二二

対称代名詞から見た狂言詞章の変遷……………米田 達郎……………三九

——鷺傳右衛門派の場合——

和泉流狂言台本雲形本と古典文庫本の本文比較……………小林 賢次……………五

——ト書き・注記に関して——

江戸・明治期における漢文訓読の展開……………齋藤 文俊……………七

——訓読から音読へ——

江戸町人の会話における漢語使用の実態……………山口 豊……………一三

——「當世七癖上戸」の使用例から——

一九滑稽本における「いふ」の用法……………神戸 和昭……………一五

——『江之島土産』『六阿弥陀詣』『堀之内詣』『雜司ヶ谷記行』を中心に——

『浮世床』における「へ」と「に」の使い分け……………園田 博文……………一五

——共用動詞の分析から——

一九世紀近世早引節用集における大型化傾向……………佐藤 貴裕……………一四

遊里における「であります」の使用意図……………長崎 靖子……………一五

——江戸後期の洒落本、人情本の調査から——

新漢語「時間」の成立と《時》の表示法……………松井 利彦……………一七

会話篇に見る幕末の江戸語……………小松 寿雄……………一九

——音節融合を中心に——

表記と音声の乖離……………常盤 智子……………二七

——英学資料の音節「エ」の場合——

『浮雲』の心話文……………阿部 八郎……………三三

格助詞「〜カラ」の用法……………田中 章夫……………三五

「〜まじりに〜」……………中野 伸彦……………三七

「隠岐アクセントの系譜」その後……………山口 幸洋……………三三

若い日の言語研修……………森岡 健二……………三七

家電名の変化……………宮島 達夫……………四〇

『英和通信』諸本考……………大久保恵子……………四〇

——会話タイトルを中心に——

『和英語林集成』「原稿」から初版への漢字表記……………木村 一……………四六

執筆者略歴…………………………四六

〔狂言役者〕による「間の語り」がなされていたわけで、ハビアンなども「融」はじめ夢幻能を観る折には、昔語りを再現する形でなされる、「間の語り」を耳親しく聞いたはずである。「間の語り」の典型的語り口（文体）を、大蔵虎明の残した「間」^註（臨川書店刊『大蔵家古本能狂言』四、五に拠る）をもとに、確認し、この文体が、ハビアン『平家物語』に与えた影響を考えていきたい。

②へ去程⁴、融大臣ト申タル御方ハ、仁王五十二代、嵯峨ノ天皇ノ王子ニテ、御座有タルト申ガ、仁王五十六代、清和天皇ノ御宇、貞観十四年八月ニ、左大臣ニ被^レ任、仁和三年ニ従一位ニ上リ、寛平元年ニハ、御年六十七ニテ、輦車ノ宣旨蒙リ、誠ニ官位宝録迄、類ヒ少ナク優ニ婀娜キ御方ニテ渡ラセ給ヒタルト申ガ、六条河原院ニ御座有タルニ依リ、河原ノ左大臣ト奉^レ号シ、数代ノ御門ニ仕ヘ御申被^レ成タルト聞ヘ候。去レハ融ノ大臣ハ：（本文略を表わす。以下、同じ）思召ス折節、御前ニテ有ル人ノ被^レ申ケルハ：其ノ景氣ヲ委ク御物語被^レ致ケレハ、大臣聞召：此所ニ塩釜ヲ造リ：是三ツノ浦ヨリ潮ヲ汲セ此所ニテ被^レ焼、修敷事ハ云モ疎ニ御座有タルト申候。塩扱ノ数モ：都ノ者共：見物致タルト承候。誠ヤラン：在原ノ朝臣ハ：加様ニ読セラレタル御哥、毎ニ殊勝ナル由シ承ル。其ノ子細ハ：加様ニ読ミ給タル御事、最ニテ有ト申。唐ニモ：此哥ニ少モ達ハヌト申。誠ニ類ヒ無キ様躰ト云ナガラ、今は早：旧跡ト罷成テ候。貫之トヤランノ御哥ニ：此處荒レ果テタル躰ヲ読セラレタルト申。（大蔵家古本能狂言）五96～103頁（以下、：を略称とする）

②は、車屋本謡曲「融」を例にとると、前場のワキ（旅僧）とシテ（尉＝融の化身）の会話ののち、前シテは、「老人と見えつるが、しほぐもりにかきまぎれて、跡もみえず成りにけり。跡も見せず成りにけり」（下87頁）という地謡にともなわれて中入りをする、その前シテと入れかわりに登場した間（狂言方が演じる）のセリフである。

間はすぐ②を言うのではなく。^{貞享年間}大蔵流間狂言本二種（能楽資料集成。わんや書店。：を略称とする）の「融」を例にとると、

③はハ。都六条当に往者にて候。此間は何方へも罷出ず候間。今日は清水へ参。東山の当をも見物致心をなぐさまばやと在る、さすが都にて候ぞ。かりそめに罷出れ共。名所旧跡あまた候得ば見所おき御事にて候、いや是成お僧は。此当にては見なれ申さぬ御方にて御座候が。何方より御出にて候得ば此所にやすらふて御入候ぞ

是ハ思ひもよらぬ事を御尋候物哉。我等も此当には仕候得共。左様の御事我等こときの者のぞんずる事にてなく候間。しかとは存も不^レ致候。乍^レ去お僧の御尋候に所に有ながら。ぞんぜぬと申もいかにて候間。およそ承たる通物語申さふするにて候

というワキ僧と間との会話を経過したのちである。③の「シカシカ」二例は、都六条辺に住む間に對して、はじめて京入りした旅の僧であるワキが応じたセリフを略記したことを示す。現行の能を例にとると、一番目の「シカシカ」でワキは、へこで「塩汲み」と称する老人に会い、ここが六条河原の院の旧跡であることや融の大臣の故事を聞いたが、老人がかき消すように失せて、不思議に思っている^{（6）}と伝え、へ地元の人なら詳しくこの話を語ってくれ^{（6）}と頼み、間は、点線部のように応じる。一旦は謙遜の上から、および、「しかとは在も不^レ致」という「語り伝える」行為そのものの神聖的要素への畏敬の念より断わる気配を見せるものの、結局、間は、「およそ承たる通物語申さふずる」と約束する。その厚意に對して、ワキが礼を述べたり、へそれなら早く語って下さい^{（6）}とつながすが、二番目の「シカシカ」である。

大蔵虎明本の間「融」では、②のごとく、へ5へ6に「承ル」が現われ、語りおさめは「ト申ス」（へ9）となっているが、私が今まで能の実演を観た限りでは、現行では語りおさめに間は、「と承り及びて候」と結ぶ。それは、貞享間狂言「融」の③の末尾「承（り）たる通（り）物語（る）」に呼応した「結びの型」と言えるし、すでに、貞享間狂言では、「：浦さびしくも見えわたるかな。と。あれはれたる躰をよませられたと承及て候」と結んでいる。ところが、貞享年間（一六八四～八八）以前の寛永十二年～十三年（一六三五～三六）にかけて清書本の成立した大蔵虎明の「間」